

結核患者を抱える家族のストレスの認知と対処行動

○本村美恵，森沢美代，藤田雅子，
松本理恵子(高知市立市民病院)

I. はじめに

結核は病気の特徴から「人に知られたくない，忌み嫌われる病気」という根強い偏見が残っている。家族の一員が結核と診断され隔離収容されることは，その家族にとって大きなストレスになると考えられる。

今回，隔離収容下にある結核患者の家族のストレス認知と対処行動を明らかにする為に，マッカバン，H.Iの家族ストレス対処理論に基づいて，結核患者を抱える家族を対象に本研究に取り組んだ。

II. 研究方法

- 対象者 排菌している結核患者を抱える家族で主たる援助者 3名
- 調査方法 マッカバン，H.Iの家族ストレス対処理論を基に作成した半構成的インタビューガイドを使用し聞き取り調査。逐語文として文章化したものをKJ法により分析した。
- 倫理的配慮 患者及び家族のプライバシーを厳守する。研究の趣旨を説明し承諾を得る。面接は個室で行ない了解を得てテープに録音した。

III. 結果及び考察

1) ストレスの認知

ストレスの認知には[結核といわれた事への衝撃][結核に対する偏見][納得のいかない気持ち]があった。結核は今なお根強い偏見があり，家族は病気が周囲の人に知られることにより患者が辛い思いをするのではないかと危惧している。また，自分自身を含めた他の家族も不利益を被るのではないかと恐れることから，周囲の人に病気を告げることを躊躇していたと考えられる。岩崎は精神病患者を抱える家族について，「家族は精神病にまつわる偏見から患者を守ろうとして，患者の発病を家族の外に知らせることをためらい“他人に言えない”病気を家族だけで抱え込み孤立しているということも生じていた」と述べている。結核患者を抱える家族でも同様で，家族自身も偏見に縛られストレスを増強させていた事が伺われる。[納得のいかない気持ち]では，結核は一般に過去の病気ととらえられている中で，なぜ結核に罹ってしまったのかと受け入れがたい気持ちと，受療行動がとられていたにも関わらず，適切な対応をとってもらえなかったことに理不尽さを感じていたのではないかと考える。医療者に対し[納得がいかない気持ち]を抱きつつ，現実には患者を医療者に託さなくてはならないという矛盾した心情を十分考慮し，家族支援を提供することが必要になると考える。

2) 対処行動

対処行動には[夫に寄り添って生きる][偏見から娘を守る][結核に対する認識の変化][結核は治るという保証を得る][前向きな気持ち][自分自身の生活の調整]

[夫への気遣い][献身的な思い]があった。

対処行動のうち [夫に寄り添って生きる][偏見から娘を守る]は、大事な夫や娘を周囲の偏見から守るのは自分であるという覚悟で、偏見に対するストレスが強いゆえにとられた対処であると考えられる。[結核に対する認識の変化]や[結核は治るという保証を得る]は情緒の安定を図ろうとする対処であった。[前向きな気持ち]を持つこともストレスを軽減しようとする対処であり、生活パターンを面会にあわせ[自分自身の生活の調整]を行っていた。国見らは、結核患者のストレスの認知と対処について「家族のために早く治して退院したい、早く仕事に戻りたい、という強い意志が働く場合は、状況を肯定的に認知し、積極的対処を行おうとする傾向にあると考えられる」と述べているが、家族でも同様に早く退院してもらいたい、早く良くなって欲しいという気持ちから状況を肯定的に認知し積極的な対処を行っていた。また[夫への気遣い][献身的な思い]はお互いを慈しみ支えあい生活を共にしてきた家族が更に絆を強化しようとする対処であると考えられる。村田らは、慢性の健康障害を持つ子供を養育する家族の対処パターンについて「統合的対処が最も多くを占めたのは、子供の病気の危機による家族の凝集性の高まりを反映している」と報告している。結核患者の家族の対処でも同様に家族の凝集性を高めることで危機を乗り越えていたと考えられる。

3) 対処行動を支える資源

[かけがえのない家族][夫を守るのは私という信念][夫への信頼感]などから、入院前より良好な家族関係を資源として持っていた。家族が結核で入院したことに対し、これらの資源を活用しながら家族で協力して乗り越えていこうとする強い思いが伺われる。これらの思いは、家族の絆を表すもので家族の核となっており、家族が危機を乗り越えていく為に重要なものであると考えられる。

以上のことから、結核と診断されたことが家族にも強いストレスとなっていることを十分考慮した家族支援を提供することが必要である。また、対処行動を支える家族の絆を強化するよう、家族の凝集性が高まるような家族支援が重要であると認識した。

IV. 結論

- 1) 結核患者を抱える家族は[結核といわれた事への衝撃][結核に対する偏見][納得がいかない気持ち]をストレスとして認知していた。ストレスの認知には家族の生活環境と個々の考え方が影響していた。
- 2) 結核患者を抱える家族は[結核に対する認識の変化][結核は治るという保証を得る][前向きな気持ち]として積極的な対処行動がとられていた。
- 3) 現実の状況を前向きに受け止めながら、患者と家族間の絆を強化する対処行動が認められた。この絆を強化する対処行動には今までの良好な家族関係が関与していた。